

ぐんまの魚の生息環境を考える(11)

おわりに

これまで、魚の生息環境について少ない知識や経験に基づいて連載してきました。現在のぐんまの川や湖沼における魚釣りを楽しめる環境はどうでしょうか？私はとてもほめられる状況にないと思いますが、皆さんはどうでしょうか？

川や沼は、カワウに食べられない大きなコイと少しばかりの稚魚中心の環境になっているように思われます。特に、自然増殖している環境が少ないことが一番気になります。このような状況について、『魚が少なければ、放流すれば良い』との考え方が主流となっているのではないのでしょうか。

お金で漁業補償してきた事や環境の改変へのミディゲーションとしての放流が幅を利かせ過ぎて、本来の機能を手助けする手法が見捨てられてきたことが一つの原因と考えられます。このような流れの中で、釣り人は『釣れれば良い』との考え方に陥り、企業のコマーシャルと相まって、数釣りを競うことが、普通になって行ったのだと思います。また、釣りを“競技”として捉える風潮は何時から始まったのでしょうか？

職業としての漁業者は、翌年に影響があるような魚の取り方はしませんが、競技を行う遊魚者は資源の枯渇など関係ありません。釣れなければ、成魚をすぐに放流すれば良いのですから。このような状況下で県内の河川や湖沼は、釣り堀(管理釣り場)になってしまったと言っても良いと思います。特に琵琶湖産アユの放流が友釣りの普及に大きく貢献したのは事実ですが同時に自然界では考えにくい、『競技や数釣り』と言った一面をももたらしました。

魚の生息状況の調査



魚の生息環境である自然の河川や湖沼は、神から授かった物であり、全てを人の都合で管理して良いと思いますか？一部の区域は管理釣り場として必要でしょうが、魚達が安心して産卵や稚魚が育つ生活サイクルを全うできる環境があまりにも少なすぎるのではないのでしょうか。漁協をはじめとする漁場に携わる関係者には、もう少し違った観点からの施策を考えて頂きたいと思います。

釣りの楽しみや水辺の環境を多面的に考え、豊かな魚の生息環境を少しでも取り戻して行けたら良いと思っています。子供達が魚の産卵場を身近に見られる水環境が増えて行くことを願って、この連載を終わりにしたいと思います。

読みにくい文章の連載に付き合ってくださいありがとうございました。

湯水の川でアユ
を追う釣り人



(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)